

三陸の近景

②

復興と不安

東北地方沿岸部に甚大な被害をもたらした東日本大震災から2年5カ月が経ちました。

「三陸」と呼ばれる地域は、本州の太平洋側、宮城県から青森県までの南北約600kmの範囲を指します。広範な地域、全ての情報を伝えることはできませんが、宗派の東北教区災害ボランティアセンターが出張所を設けた岩手県陸前高田市の情報を中心に宮城県以北「三陸」の今の様子をお伝えします。

「いま、被災地では何が問題となっていますか？」という声が寄せられます。

全ての人の思いを代弁するような資格も立場もありませんが、仮設住宅に入居されている人々の間

では「仮設の次が見えない」という復興への不安が広がっていると思います。住まいの問題です。災害公営住宅に入居を申し込むべきか、自分で土地を購入し家を建てるのが早いのか、あとどれくらいこの仮設に居ることができるのか、悩みは断続的に続いています。

入居当初は2年間、あるいは3年間で仮設を撤去するという時限が存在しました。津波で家を失った人たちは、3年で復興事業を完了させるという行政の姿勢を感じ早期復興を期待していたのです。

しかし、浸水地域の活用方法や、私有地の買い取りなど意見の食い違う問題が山積し、新しい街作りは見える形で進んでいないのが現実です。復興への道を歩んでいる

のは確かなのですが、住まいの問題を発端として、不安と諦めの感情が多くの人を支配していることもまた事実です。

ところで、どうして私たちはこのような状況を知らないのでしょうか。

それは報道が被災地の明るい話題を中心に提供しているからではないでしょうか。復興への道しるべとなるような情報だけが全国に届いているからなのです。

実際に2万人もの方の月命日である毎月11日のニュースを見ていても、被災地の情報が減ってきたように感じます。

毎月10日号の本欄によって「がんばろう」「負けない」だけでは解決しない被災地の現実を少しでも知っていただき、「復興」のことばで覆いきれない問題を多くの人たちで共有する機会にしたいと思っています。

(金澤 豊)